

現代社会における都市雑業の展開

——新宿、隅田川周辺地域の事例より——

山 口 恵 子

(受付 2001 年 5 月 10 日)

1. 問 題 設 定

本稿の目的は、都市雑業がどのように営まれ、かつどのような制約を受けているのか、その仕組みを記述することである。とりわけここでは野宿の状態にある人々の従事する都市雑業に注目している。

都市雑業にあたるものはこれまでもずっと都市社会のなかに存在してきた。しかしとりわけ高度成長期以後の動向についてはほとんど研究の対象とはなっていない。ごく近年になって、例えば野宿者運動を進める笠井和明は、「都市雑業というのは『古く』からある貧民の生活の知恵である。『日雇いできなきヤダンボール集め』これに何の差があるだろうか？何をしても人々は生きる。生きるためにはカツアゲだろうが、泥棒だろうが何でもする。これは善悪の問題ではなく現実の姿である。雑業が正規な労働ではないなどという価値観がいつのまにか植え付けられて来たが、果たしてそうなのかともう一度疑ってかかる必要がある。」と、既存の労働観を相対化する視点を都市雑業から見いだすことを指摘する（笠井，2000，pp. 44-45）。しかしこれらはあくまでも指摘にとどまり、現代の具体的な都市雑業の動向や位置づけはほとんど明らかにされていないように思える。よって本稿では、まずは野宿者が従事する都市雑業の仕組みについて記述することを試みたい。野宿状態にある人々は生き抜くためにさまざまな生業に従事している。しかし同時に彼／彼女らは絶えず社会的排除のもとにあり、生業にも多くの管理の網がかけられる。ここではそのような生業の仕組みの中でも、雑業の成立を可能とし、かつ強力な制約を与えるような都市の

側面に注目していきたい。

さらに、野宿者の従事する都市雑業に注目することは、今日の彼／彼女らをめぐる社会情勢をふまえた意味もある。つまり、政府または地方自治体など各行政機関が、野宿者に対する本格的な対策を打ち出しはじめている。後ほど再び触れることになるが、例えば東京でも、東京都福祉局が2001年に『東京のホームレス——自立への新たなシステムの構築に向けて——』という報告書を出し、野宿者をめぐる現状と対策を示した。ここで「ホームレス問題」の問題性とは、「極めて厳しい生活状態におかれ、社会システムから排除されやすくなって」いること、「公共空間を占拠」し、「地域社会との摩擦」が生じていることと規定されている。そして「問題解決」のための基本的視点として、「自立への意欲をもつホームレスを支援し、地域社会の一員に復帰させること」などの「ホームレス自身の自助努力」と、「社会全体で取り組むべき課題」をいう。具体的には就労、住宅、保健、医療などの対策を基本とした「自立支援」と、公共施設の「適正管理」が方向として示された(東京都福祉局, 2001, pp.35-45)。ここでいうところの「自立」とは野宿を脱して「社会復帰」をはかることであり、「就労」とは、言うまでもなくそこでの「一般的」な賃労働であり、「就労」の「意欲」とはそのような賃労働につく「意欲」であると考えられる。そこに都市雑業という生業の存在は全く入ってこない。「就労」「自立への意欲」が自明のものとされ、あとは公共空間の使用の適正化ということともからんで、都市雑業もろともあってはならないものとしてより強力に排除されてしまう問題性は小さくない。よって、本稿では都市ゆえに生かされる雑業の様相を記述することで、そのような行政による「回収」のあり方が一面的であることをも示したいと考えている。

用いている事例などのデータは、東京の主に新宿駅周辺と浅草を中心とした隅田川縁で野宿をする人々、またはそれにかかわる人々に対する調査にもとづいている。新宿駅周辺で野宿をする人々は800人以上ともいわれており、駅周辺には夜のみ寝床をつくる移動層が、近くの公園などには昼夜

を問わず置かれているテントや仮小屋での「定住」層が多い。また、隅田川縁には近くの公園も含めて、現在、1000軒を越える仮小屋やテントが作られ、人々が生活している。両地域とも、ときにボランティア団体や運動団体の一員として、ときにそれから離れて、質的および量的調査を行った¹⁾。

以下、まず、野宿をする人々にとっての仕事としての都市雑業の位置づけを概観する。次にその仕組みと制約について具体的に記述を行う。そして最後に若干のまとめと今後の課題を示す。

2. 野宿者と仕事

一般的に仕事につく場合には、何らかの自己の証明を示すことを求められる。それは、履歴書であったり、身分証である場合もある。住所や連絡先が問われることはいうまでもない。また仕事に耐えうる健康さも求められるよう。しかし、野宿の状態にあるということは、まずもって住所や連絡先がないということである。そして履歴書や身分証も出せなくなる場合が多い。そうすると、日本では野宿をしていることはあたかもひとつの「身分」として、あらゆる生活場面で大きな制約として立ちはだかる。とりわけ就労の際には、いきおい条件が悪くならざるをえない。このような野宿の状態にある人々が従事している仕事について概観するために、都市生活研究会が2000年3月に東京にて行った野宿者の聞き取り調査を参照してみよう。これによると、路上の対象者710人のうち、その半数の351人が、現金収入のある仕事についていると答えている。その種類について複数回答にて聞いたところ、表1のような結果が出ている。

これをみると、野宿をしている人々が多く従事している生業は、大きく

- 1) なお、新宿駅周辺の調査は1996年から始めており、一方、隅田川周辺の調査は1999年からである。よって得た事例にやや時期的な差異があるけれども、ここでの目的に照らし合わせると大きな問題ではないと考える。また、文中に用いている人名などの固有名詞はあらかじめ仮名にしてある。会話のカギカッコの中にカッコが入っているのは、話を分かりやすくするためにこちらで補った言葉や説明であり、「……」は人名以外の固有名詞で、匿名化したものである。

表1 現在、現金収入を得る仕事（複数回答）

	西 部	東 部	その他	計
建 設 日 雇	60	44	38	142
運 輸 日 雇	14	12	11	37
そ の 他 日 雇	4	12	10	26
特 別 清 掃 事 業	1	17	0	18
チ ケ ッ ト 並 び	40	17	20	77
廃 品 回 収	6	31	27	64
本 集 め	35	8	9	52
サンドイッチマン	3	0	1	4
屋 台 手 伝 い	1	1	1	3
そ の 他	12	3	0	15
計	176	145	117	438
該 当 票 数	138	113	100	351

注) 西部とは新宿駅、渋谷駅、池袋駅周辺と付近の公園を含む
 東部とは上野駅・公園周辺と隅田川、山谷地域を含む
 その他は日比谷付近、多摩川付近中心

出典) 都市生活研究会『平成11年度路上生活者実態調査』巻末統計票
 p. 15 より作成

ふたつに分けることができよう。ひとつは、いわゆる一日契約にて雇われて働く「日雇」の仕事である。表1からは、438の回答のうち、建設の日雇が142と群を抜いて多く、続いて運輸の日雇37、その他日雇26、特別清掃事業（東京都が雇用を創出した軽労働）18という結果がみてとれる。建設日雇には、建設・土木業の現場の仕事や日雇で「飯場」（いわゆる作業員宿舎）に入るということもありえる。また、次のような軽作業の仕事についている例もある。

新宿のある公園にはブルーシートやテントで定住している野宿者が多い。この野宿者の一部は、忙しい月で半分近く、暇な月で4、5回、軽作業の仕事に仲間であとまって行っている。仕組は、野宿をしている‘Mさん’がいつも会社に電話を入れる。会社からは「明日何人、何時何分に会社に来てくれ」とい

うように人の手配を頼まれる。‘Mさん’は公園内の知り合いに声をかけてその人数を集める（‘Mさん’は手配師ではない。他の人と同じように仕事もするし賃金も同じ。「取りまとめ役」という感じだという）。当日はみな新大久保にあるその会社に行くことになるが、15、6人くらいでまとまっていくことが多い。その会社についてから仕事の内容が示され、そこから現場に行くことになる。仕事内容はいわゆる軽作業で、倉庫やオフィスの引越し、ベッドや机の搬入、廃棄の仕事（例えば重機やラック、保管庫など、ボルトをはずしたりしてばらす）。賃金は一律一日7500円で、昇給は一切ない。この新大久保の会社には正社員も15、6人いるけれども、人手が足りないときにはこうしてアルバイトを雇うのだという。本社は東京都芝浦にある大手の運送会社である。「面接もないし。住所もないし。でもこの会社の社長なんか（人間が）できてるよ。だって、うちらなんか野宿してる人間でしょ。でも野宿者としてはみてないもん、だって。社員もできてるよ。見下さないもん。」（浜本さん／男性／36歳／新宿付近の公園で野宿／野宿歴約3年／2001年5月5日に喫茶店にて行った聞き取りより）

ふたつは日雇などの雇われて仕事をする以外で、賃金や労働条件などに関して国家による規制がなく、都市において現金を得るためになされる生業がある。それを一括して都市雑業と呼んでおく²⁾。本来ならば、都市雑業は野宿をしている人々のみの生業ではなく、より広い層のものとしてあるはずである。しかしここではそのような都市雑業の境界を確定したり、全容の解明が目的ではない。むしろ野宿状態であるがゆえにその存在は都市社会と分かちがたく結びついており、よって彼／彼女らの従事する都市

2) 野宿する人々が生き抜くために、エサ取り（店などで捨てられた食べ物を集める）、炊き出し並び（支援組織などの炊き出しに並んで食を得る）などのような、食べ物を直接手に入れる方法もある。またごく少数ではあるが、「泥棒」なども生き抜くためにはなされる場合もある。これらもどこの店が良い食べ物が捨てられているのか、何時にどこに行けば手に入るのかなど、獲得するためには知恵と技術が駆使されている。また、すぐ後で示す「山谷、上野調査」の現在の収入を得る方法の項目一覧からもうかがえるように、雑業をしながらエサ取りもするし炊き出しにも並ぶ、という人も少なくない。これらも都市雑業として含めるということも考えられたが、ここではその性格をはっきりさせるためにも、あえて含めないことにした。「日雇」についても同様である。

雑業こそ、その都市の様相はより明瞭に表われてくる、それを明らかにしようとしている。そのような意味では、本稿で明らかになるのは現代社会にて野宿する人々が従事する限りにおいての都市雑業の一側面であることとはいうまでもない。

都市雑業の仕事には基本的に年齢制限もなく、先ほどあげたような履歴書などの条件も必要とされない。表1からは今日、東京で野宿をしている人々が多く従事している雑業が推測される。つまり、並び(野球やコンサートなどのチケットを手に入れるために列に並ぶ仕事)、廃品回収(空き缶、銅線、廃品のテレビやビデオなどの電化製品、段ボール、その他を集める)、本集め(捨てられた雑誌や本を集める)などである。その他、数は少ないがサンドイッチマン(いわゆる看板持ちで、店の宣伝のプラカードを持って立ち続ける)、屋台手伝い(露天商)などもみてとれる。さらに、ここには名称としてはあがっていないが、地見屋(道などに落ちている金目のものを探して回る)、銀杏集め(季節によるが銀杏を拾って売る)も存在する。

都市雑業には価格の上下や社会的状況にあわせて流行り、廃りがある。例えば使用済みのテレホンカードを集める「テレホンカード集め」は95年以前には1枚あたりの買取値段が30円～35円と高い時期もあり、従事する人が目に付いた。しかし96年時に12円前後になっており、かつ携帯電話の普及でテレホンカードを使う機会もめっきり減ったので、集める人はほぼなくなった。さらにはチケットの並びなどで、プロ野球や相撲のものなどは売られる時期の影響が大きく、恒常的にあるわけではない。加えてチケットは今日、インターネットによる販売に切り替わりつつあり、仕事の量が減る傾向にある。

日雇と都市雑業に従事するパターンで最も多いのは、日雇の仕事につく機会が減り、だんだん雑業に従事する時間が長くなるというものであろう。ふだんは雑業をやっている、日雇の仕事があれば行っているという人は少なくないが、現実的に日雇にいくことができる層と都市雑業につく層と

ではある程度差が出てくる。例えば1999年に行った「山谷，上野調査」では現在の収入を得る方法を聞いており，やや煩雑になってしまうけれども，回答項目をざっとあげてみたい³⁾。以下，ケースごとにカッコでくくられている。

「日雇週1～2回，土方」「月3回の仕事で月35000円，左官・土方」「大工」「水道管の配管工事をやってる」「日通で引越し」「あったら飯場」「たまに現金」「白手帳で月4回」「都の仕事（草刈）半日1万円，月2回，」「ビル清掃など月に約4日（土日）」「アルバイトとして地下鉄における片づけ，荷物運び，土木作業など」「教会の炊き出し，週に1回ぐらい土工の仕事」「引越しの仕事に行く，友達にもらう」「1週間に2回は土工や引越しの仕事に行っている，炊き出しに並ぶ」「寝場所の近くの露店の手伝いで数百円づつ」「テキヤの掃除，屋台のぼらし1日4000～5000円飯つき」「露店（たこやき）歩合制，正月は9000円～10000円になる」「夏には並び（野球のチケット）徹夜で3000円」「ダンボール集め」「古新聞収集キロ3円ぐらい。飯食ってなくなる」「看板もち，ビラまき，紙類の仕事が主」「雑誌拾い最低価格30～50円，1回約3000円，週に2～3回」「雑誌等の回収1キロ3円，1日1500円ぐらいになる」「雑誌拾い1冊50円，20冊集めて飯代にする」「古本集め1日500～800円」「本集め1日360円～460円」「月2～3回週刊誌集めで1日2000円，建設日雇い」「アルミ缶1キロ40円，1週間で810円～930円」「アルミ缶集め1キロ65円，電気製品（テレビ1台1000円），釜類1キロ65円，赤線（銅線）1キロ145円」「ごみ収集（アルミ缶やダンボール）1日500円ぐらい」「缶集め（煙草銭程度）」「アルミ缶集め，エサトリ」「ぎんなんにとって1キロ400～500円で業者に売る」「炊き出しのみ」「炊き出し，コンビニ期限切れ」「炊き出し，福祉のパン」「あちこちの炊き出しと残飯」「炊き出し，たまに土工で仕事に行く」「エサトリはしている，友達から時どき500円もらっている」「食事は炊き出し，煙草は友人から」「昔の友達に時どき煙草銭（1000～2000円）を借りる」「年金を月4万もらっている」

若干の例外はあるものの，日雇系の仕事をあげる者と雑業系の仕事をあ

- 3) ただし，この調査は主に当事者・支援者団体による食事の「炊き出し」に集まる野宿者を対象として調査が行われていること，また山谷，上野地域（一部隅田川縁も含む）のみでなされたものであるという点では限界がある。また全く同じ回答はこちらで選択してひとつしかあげていないなど，回答数は考慮していない。「山谷，上野調査」の詳細については，（田巻・山口，2000a）（田巻・山口，2000b）を参照して欲しい。

げる者とに分かれる傾向があることがうかがえよう。そして雑業系の仕事は露天商以外は超低収入であることがみてとれる。

しかし日雇の仕事があれば、皆それに従事するとは限らない。とりわけ建設・土木の日雇に関してはそうである。例えば、野宿する人々が集まっているところには時に手配師がやってきて仕事に誘うことがある。ほとんどが飯場の仕事である。しかし、「手配師から声かかるけど、ヌキ4000円(食事代や宿泊代もろもろを引いた手取額)とかじゃ行かないよ。土方やったこともないし」(男性/51歳/隅田川べりで野宿/野宿歴約1年半/1999年11月21日、「山谷、上野調査」回答者の覚書より)という話からもわかるように、仕事は重労働でも、低賃金を提示されることが多い。しかも手配師に誘われていったら賃金を払わない飯場だった、暴力をふるわれたなどの報告も少なくない。管理されて重労働、ましてや賃金がもらえないかもしれないリスクを犯すよりも、体調にあわせて自由にできる雑業の方が選ばれたとしても不思議ではない。特に野宿状態になって日が浅い人々で、建設日雇などの重労働にこれまでついていたことがない人などは、たとえそのような仕事につくチャンスがあったとしても躊躇^{ちゅうちょ}するものである。さらにテントや仮小屋などを作って比較的安定して住んでいる層は、落ち着いた居場所を放り出してまで、期限のある仕事には行きにくい。このように生き延びるために何をするかは、仕事の条件や現在または過去の生活条件等によって決まってくるものであろう。

この都市雑業であるが、本稿では特に本集めと缶集めに焦点をあててその仕組みを記述してみたい。表1からもみてとれるように、廃品回収が64(この中の大きな部分をアルミ缶集めが占めていると思われる)、本集めが52と、これらの雑業で収入を得ていると答えている人の割合は小さくない。本集めや缶集めなどの廃品回収に属するものは、長い歴史を持って都市下層の人々の収入源としてあった。相当さかのぼるが、昭和22年東京都社会局の行った「浮浪者」を対象とした調査でも、「バタヤ」家業が頻繁にとりあげられる。「バタヤ」は「掘り屋」「拾い屋」「買い屋」に大きく分けられ、

「堀り屋」は「焼け跡や川の中などを捜すヨナゲ」, 「拾い屋」は「車を曳いて歩くもの, バタ籠を背負って歩くもの, 拾った果物等を負って歩くか又は籠のないもの」「買い屋」は「車の他に秤を用意しデモ（買入れ資金）を持つもの」などと示されている（東京市社会局, 1935）。それらが歴史的にどのような道筋をたどって現代にいたっているのか, 歴史的な分析については稿を改めたい。ここでは, 今日見られるような「拾い屋」家業が, かなり以前から存在していたことを確認しておくにとどめる。

3. 都市雑業の諸相

(1) 本集め・売買

本の集め方についての具体的な状況はすでに別稿にて記述を試みたので, ここでは簡単に概略を振り返るにとどめる（山口, 1999）。本は, 地域の資源回収の日に家庭からでた古本のゴミを集めたり, コンビニエンスストアや街中のごみ箱の中を探するというやり方もあるが, 現在最も多くの人に従事しているのは, 電車を利用するものである。電車の網棚やイスに放り投げられた雑誌や本を集めたり, 駅にいくつかあるゴミ箱をひとつひとつみて, 捨てられた雑誌や本を集めるやり方である。東京の何百万人という人の流れのなかで, 雑誌は次々と捨てられており, 集める時間帯は電車の込む早朝が最も効率がよい。本は, 汚れていない, 破れていないなど, ある程度, 商品としての見栄えがないと業者に買い取ってもらえない。また, 最も良く客が買っていく週刊誌, 週刊の漫画雑誌などは, 鮮度が命であり, 販売業者の買取りは基本的にその雑誌の発行当日か遅くて翌日までのものに限られる場合が多い。集め方にはひたすら一人で駅から駅へと集めて回るもの, 一人で一箇所の駅にずっといるもの, グループで役割分担をして集めるもの, 例えばゴミ箱から拾い出す役割と, その拾い出したものを集めてまわる役割で分担し, 合理的に集めるものなどがある。なかには以下のようにネットワークが利用される場合もある。

雑誌集めの途中、突然、上下そろいの駅の掃除の制服を着た、まだあどけなさの残る顔の男性が、小さいビニール袋を山下さんに差し出した。すすっと近づき、さっと渡して、にっこりしながらなにやら山下さんの耳元でささやいて、離れていった。みるとビニール袋の中は、ジャンプが7、8冊入っていた。このすぐ後、この男性が床にしゃがみこんで、ごみ箱を開け、雑誌だけ集めているのを目撃。どうやらプラットフォームの掃除のついでにたまたま本をみつけたから、というわけではなく、確信犯的に雑誌を集めているようだ。「時どき、こうやってもらうこともあるんだ。でも彼らは駅の人に見つかったらクビだよ。仕事外のことやってるんだから。だからときには俺もジュースぐらいおごてるよ。」と山下さんは説明してくれた。最後、本をお金に換金して帰り際、山下さんは「あの人もらった分が、今日は多かったなあ」と、あらためてこの掃除の男性への感謝を口にしていった。（山下さん／男性／52歳／新宿駅地下街で野宿／野宿歴約6年／1996年8月26日）

こうして集められた本は、現金化するのに買取をしてもらわねばならない。その方法は、駅の中で買取をしてくれる者もあり、そこに売ってしまうというのが効率的ではある。しかし多いのは、やはりどこかの買取場所に自ら持ち込むことである。その場所は、ひとつは合法的な店舗を持って誰でもわけ隔てなく買取をするリサイクルの店や古本屋がある。例えばYショップは高層ビル街の谷間にあった。

朝7時20分、本拾いのため、私と私の友人の北君と山下さんは歩き出した。途中、「ここが買い取ってくれるんだ」と、巨大超高層ビル群のふもと、巨大電化製品店や飲食店のひしめく一角歩いているときに山下さんが指をさす。つい見逃してしまいそうな一畳ぐらいの狭い間口。こんなところで、雑誌を買う人がいるのかなあと不安になる。その店のねずみ色のシャッターはまだおりたまま。しかしよくみると、その上にはA4版の白い紙が張ってある。そこには「買取」の文字とともに、雑誌の名前が8、9種類並んでいた。その日は結局、別の所で買取になった。気になったので、山下さんと別れてから北君と一緒に再びこの店の様子を伺いに行った。とたんに耳に入る、大きな声。店員が景気良くまくしたてる。「100円だよ、100円、100円！……はもう数がないよ！」次々に立ち寄るスーツを着た人々。通りに面した店先には、「100円」とくっつきとかかれたプレートと共に、平積みの週刊誌や漫画がうず高く並べられている。店の奥は中古のCDやゲームソフトが並んでいて、若者が時折店に入っていく。ま

さに飛ぶように売れていた。本の向こう側で別の店員が手元で本の売れた数を「正」でつけていた。おびたしい「正」が並んでいた。(前掲 山下さん 1996年8月26日)

私と山下さんは、しとしと落ちる雨の中、片手に傘、もう片方に雑誌のぎっしり詰まったペーパーバックを濡らさないように持ち、中古CD店に向かう。店先で店員に声をかける。店員はすぐさま手際よく冊数を数え、すらすらと領収書を書いた。山下さんもさっさとそれにサインをして、金を受け取った。私たちが集めた本はその場で店先の平積みの本の上に重ねられて、商品となった。誰が足を止めるでもなく、あっという間だった。今日の山下さんの稼ぎは4500円。ライオンのように髪をボリュームアップした若い店員の顔をうかがいながら、話を聞いてみる。「1日20万ってどこですかね。2000冊。そのうち人件費とか引いたら、まあ、こんなもんですよ。こうやっておじさんたちに集めてもらってねえ。私が来て半年ぐらいで、その前に1年ぐらいやってるから、ここ2年ってどこでしょうか。」(前掲 山下さん／1996年9月30日)

Yショップでは、誰であろうと商品になる本を持ち込めばすぐお金と引き換えて終わり、というマニュアル通りのすばやい売買が行われていた。それに対して、路上で「不法」に1冊100円で雑誌等を売る露店がある。このような露店では、多くは毎回買取をする人は決まっており、本を売り込む側が都合よく店を変えることは嫌われている。次の事例の浜本さんは、新宿で野宿をはじめてすぐ本集めのグループに入り、本拾いをやったり市ヶ谷で開かれている露店の店番をまかされたりしていた。

以前から疑問だったことを聞いてみた。「市ヶ谷のときとかは、仲間以外の人の本を持ってきたても買ってあげてた？それとも仲間だけしか買わないとかっていうのがあった？」浜本さん曰く、「ああ、中には顔でやってたんだけど、いちげんさんはお断り出してたよ。まあ、今日持ってきて、明日持ってこないっていうのは、世の中に反するからね。だから集めてる仲間もほとんど同じとこだよ、持ってくるの。毎日おんなじとこにもってくるんだよ。そうじゃないと、常識は常識だからね。決まってるんだよ。なんだおまえ、今日初めてじゃないかー、だめだーとか言われる。他へ持ってけーとか。やっぱ常識っていうのがあるじゃない、そういう世界でも。」(前掲 浜本さん／2001年5月5日)

また、この市ヶ谷の露店もそうだったのであるが、多くの店はいわゆる「ヤクザ」がシノギの一部として開いていることが多い。しかし新宿では野宿者自身を取り仕切って店を開いているところはいくつかあった。

駅の改札のすぐそばの壁際、ひざぐらいまでの高さの台が1畳分ぐらい置かれている。その上に、びっしりと雑誌が種類ごとに積まれている。壁を背にしてどっしりと丸イスに座り、珍しく親分のじょちゃんが店番をしていた。他にも今日は、よく1人ででも店番をしているにこやかな顔のおじさんと、まだ店番を始めて日の浅い、若い小太郎さんも働いている。小太郎さんは乱雑になった本をそろえ直したり、数が残り少なくなった雑誌については、向かいの壁際に作られた段ボールで囲った本の置き場から補充したりと、休む暇なく立ち回っている。「おい、小太郎、きれいな本を上に乗くんだ。」と、じょちゃんは小太郎さんを、半分からかうように、いろいろと指示を出している。にこやかなおじさんは、慣れた手つきで、紙袋を下げたおじいさんが店に近づいてくると、すぐさま向かいの本置き場の方に誘導し、すみっこで本をやりとりをしている。本を集めて売りに来た人に対応しているのだ。主には男性の客が次々に立ち寄り、一目で本を手に取り、100円のワンコインをじょちゃんの手ひらにさっと渡して、立ち去っていく。じょちゃんは四方から差し出されるコインにテキパキと反応する。客の合間を縫って、横から話を聞く。「雑誌集めるの、東京で1000人くらいいるって。吉祥寺や渋谷とかにも結構あるだろう。新宿周辺で7つある。うちで10人くらい使ってるよ。でも常時来るのは4、5人かな。いろいろあるけど平均して(買取は)1冊30円。でも3、4冊しか持ってこなくても、持ってきたら100円や200円はたくさんやってるよ。あいつら酒が飲めればいいんだからさ。このごろ本が減ったよ。みんな捨てなくなっちゃってね。みんなこんなもん家に持って帰るんだもん。でもまた良くなると思うけどね。1日の最高は7万。ここは……組のシマなんだよ。こんなところでやってたら、なめられてるって思うよな、そりゃあ。いろいろされてるんだ。でも……組は力弱いからね、他のところに頼んでる。金払ってるよ。こうやって座っているとラクそうに見えるかも知ないけど、やくざだ、警察だ、って大変なんだから、ほんっとに。」(新宿駅西口地下にある露店にて／1996年9月7日)

店の売り上げは人通りの多さが勝負であり、改札から屋外に出る境目や、地下街から階段を上り終えた地上出口のすぐわき、駅に向かう大通り、盛り場の大通りなど、人通りの絶えない場所にある。この店は、すぐ近くの

地下街の一角で野宿をしているじょっちゃんを取りしきっていて、ヤクザや警察への対応にもあたっていた。そして店番は、信頼が置けると彼が見込んだ他の野宿者が入れ替わり、2、3人でやることになる。というのも、例えばここで出てきた小太郎さんはその後信頼を得て、お金の管理を含めて店番を全面的にまかされた。そしてほどなくして、店の売上などもろもろ10万円をそっくり持って姿を消した。じょっちゃんは「あいつ探してくれよー。見かけなかったか？」と歯軋りしていた。そのようなことを警戒して、店番をするのは親しい人になってくる。それをまかされると買取から接客まで多忙であるが、小額のお金がきちんと払われる。本を集めて持ってくる人は、店番とは一線を画されており、しかしやはり顔ぶれはだいたい決まっていた。

こうして人々が集めた本・雑誌は、一般のリサイクル店を通して、また野宿者自身の店を通して、再び客を獲得していった。

(2) 缶集め・売買

アルミ缶の集め方は、ターゲットによって大きく分けてふたつある。ひとつは、街中にある自動販売機の横についている缶専用のゴミ箱や一般のゴミ箱を回って集めるやり方である。この方法であると、曜日や昼夜に関係なく集めることができる。しかしゴミ箱のふたを一つ一つ開ける必要もあり手間がかかる。また街なかの自動販売機にはアルミ缶の主力であるアルコール類の缶が少ない。コーヒーやジュースの缶は多くがスチール系なのである。だから集まる量は限られている。よって多いのは、住民が缶を分別して捨てる資源ごみの日に地域をまわってアルミ缶を集めるやり方である。住民が回収カゴに缶を捨てるのを見計らって、夜および早朝、つまり回収車が巡回して缶を回収してしまうまでの間にカゴを回って、スチール缶も混ざっている中から、アルミ缶のみを抜き取って集めるのである。

いっちゃんは横1メートル縦1.5メートルから2メートルくらいの、頑丈な台車を押して歩き始めた。けっこう早足で、時に私は小走り。カーブも上手に

曲がって、ぐんぐん進んでいく。歩道と車道を区切る白い線の外側にぴったりそって、ごろごろごろごろカラカラカラと音をたてながら。

あたりが薄暗くなるなかでも、赤と白の縞模様のカゴが2つ、また場所によっては3つ4つそろえて並べてあるのは分かる。多くはビンとカンを分けて捨てるようになっている。通りの端に等間隔にならんだカゴは、側面の下の方はあみ状になっているので、うっすら中の様子が見える。いっちゃん台車を押して歩きながら、すばやくスチールとアルミの缶を一瞬にしてみわけているらしい。ほとんど止まらずにちらちらとカゴを遠目にみて進んでいく。やや広い道の片側を歩いているので、「反対側はいいんですか？戻ってくるの？」ときくと「いいよ、ちゃんとみてますから。」どうやら缶のテカリ具合、つまりスチール缶は底などが透き通っているのに対して、アルミ缶はテカリが鈍い。それと銘柄ですぐ判断がつくようだ。いっちゃんは缶が固まってあっても、決してがらがらがらと無造作に自分のビニール袋に放り込んでいかない。片手に一個か二個そっとつかんで、袋にそっと落とす。それをくりかえす。うるさい音をたてることには気を配っている。「時間帯があるんですよ。メシ食って片付けと一緒にさあ出そうかっていうとき。今はちょうどそれが一段落したところだから、これからしばらくは出ないよ。後は寝る前ね。寝る前に出そうっていうことになる。」

ふと、自転車で缶を集めている人といっちゃんは長話をはじめ。この自転車がすごい。荷台にハップウスチロールのような人幅よりはるかに大きい箱を二つつみ、さらにその上にふくらんだビニール袋を載せ、乗っている人の上半身を超えている。とても後ろは見えそうもない。それに横に袋をまたくりつけている。転びそうな大きさだが、バランスは取れているのだと思う。やや長髪の帽子をかぶったおじさん。いっちゃんは延々としゃべっていた。「知ってる人ですか？」「はい、近くの人。俺のほかにも今日は向こうで2人くらい（缶集めを）やってるって。」（いっちゃん／男性／60歳？／隅田川べりで野宿／野宿歴約2年／2000年12月5日）

このようにアルミ缶の集め方には、自転車を使う人と、台車・リヤカー・旅行等に持っていく車輪のついたショッピングバック等を引っ張って歩き回って集める人とは大きく分けることができるだろう。

こうして集められたアルミ缶はつぶさねばならない。なかには道具を持っている人もいるけれども、多く人は足で踏んでつぶし、巨大なビニール袋に詰め込む。これも一つ一つ踏みつぶすことになるので、時間と場所が

必要となってくる。

そして現金化するため、買取りのもとへ持ち込まれる。現在、隅田川の周辺にはその形態からいうと、大きく二つ方法がある。ひとつは、近辺の廃棄物再生事業所に直接持ち込むことである。例えば、S商会は川の手前で、30年以上前から廃棄物再生事業所を営んでいる。取り扱いは鉄・アルミスクラップ、真鍮・銅・ステンレスなどのその他の非鉄、空き缶などの金属で、基本的に回収・買取・分別・圧縮までが仕事である。現在は区の委託を受け、近隣町会の資源ごみの回収も行っている。この会社を通したアルミ缶のリサイクルの流れは次のようなものである。S商会が買い取ったアルミ缶は圧縮し、この商会にトラックでやってくる複数の運びの業者で、最も高い値をつけるところに売る。その業者は、千葉にある大きなアルミ缶の溶解・再生工場にそれを持ち込む。その工場では不純物などを除いて、溶かして固め、次の製品にしやすい形にする。そして別の加工業者が再製品にする。

橋のたもとのかなり大きい工場だが、古い。トタンがすすけ、会社名がすすけている。ガーガーと耳をつんざく機械のすれる音、硬いものをつぶす音が響き渡る。天井からつるした巨大なまろい磁石が動き、カチカチ光るスクラップを無造作に押しつぶしては、鉄だけをくっつけて、右へと移動させる。または、山と積まれた缶に磁石が近寄り、スチール缶をくっつけて分ける。残ったアルミ缶はそのまま四角い型にぎゅっと押し込められて、でてきたときは、1メートル四方ぐらいの四角い固まりになっている。工場の中心に事務所がある。作業ズボンに白い長袖Tシャツをきたおやじさんに、話を聞く。「鉄はもう全然だめ。スチールは1トン持ち込まれるごとに逆に1000円もらってるくらいだよ。アルミは比較的値が安定している。アルミ缶の買い取りは1キロ76円。アルミ缶は1日に2トン近く集まるかな。30年前はアルミは50～60円だったが、昨年の夏は買い取りがキロ100円だった。ここ3、4年前頃から、リサイクルなんて言い出してから、アルミの値段があがった。キロ100円のころはホームレスらしき人の持ち込みはなかったのにねえ。6ヶ月前は2、3日に1回くる人も含めて平均して、5、60人のホームレスらしき人が来ていたが、今は30人くらい。遠くから自転車や大きい台車に積んで持ってくる。なんだかんだいって2000円から4000円は金が入るからね。新宿から1日2回自転車で持ってくる人がいる。

飯田橋からも紙屋でリヤカーを借りて、義理があるから紙も集めるけど、アルミ缶もつぶして同時に集めて持ってくる人もいる。上野からも夜中2時から集めて、ここに朝5時に持ってくる人がいる。ここは朝6時半から開けるので、待っているらしいよ。1週間に6日は持ってきて、1回に4000～5000円もらってかえっている。ホームレスの人に、……橋が金に見えるって言う人がいた。」（S商会／2000年8月29日）

ふたつめに、野宿をしている人々が集まっている場所をトラックで巡回してアルミ缶を買取にくる業者が数社あり、そこに売るというやり方がある。例えば、もっとも買取を広範囲にやっているM商事は、埼玉県草加市の住宅街の中に小さな作業場をもち、やはりアルミ缶の回収・分別・圧縮までを行っている。仕事は、オーナーの初老の男性、彼の20代の甥、元野宿していた40歳前後の男性の3人で主に担われている。この業者は2000年の5月ごろから、キロ70円で買い取るというビラを配って参入してきた。当時、持ち込みのS商会がキロ約65円で買い取り、また野宿場所近くまでやってくる別の業者がキロ45円で買取だったという状況に対して、M商事は、野宿場所近くまで買取に来て、しかも金額が高いということで、すぐ口コミで広まっていったという。ここは社名入りのトラックで毎週、決まった曜日と時間帯に決まった場所を巡回して、野宿者が集めたアルミ缶を買い取っている。決まった買取場所は、墨田区で16箇所、台東区で10箇所を含め、都内8区の約40箇所に広がっている。「1日1トンのあがりでも26000円にしかない。せめて2トンは集めたいですよ。」（M商事／2000年11月5日）と言い、野宿する人々が集まっている場所を東京中探してまわり、彼／彼女らの集住地をみつけると、そこでアルミ缶集めをするように話を持ちかけている。

M商事は、時に野宿者にパンを配りながら自分のところに缶を持ち込むようにアピールしたり、集めた缶を入れるビニール袋を無償で提供したりと工夫をこらしている。また野宿をしていた人を格安で雇い、回収を手伝わせたりもする。しかし、業者は手秤を使って集められた缶の重さを量る

ので、「キロをごまかされているのでは……」と野宿者の不信任感は強い。また、業者自身も「ビニールを空けてみたら、空き缶の中に石が入れられていて、重くなっていた」と不信任感を口にする。しかし野宿者の集める缶をめぐって複数の業者が競合しており、集める側は業者の提示する買取値に敏感に反応し、より高いほうに持ち込もうとする。よって、結果的にはいえ業者が競争することになり、買取の値段が落ちにくくなっている。

(3) 都市の機会について

以上のように本や缶の収集と売買の諸相をみてくると、そのなかで都市社会がうまく利用されていることが分かる。まず、都市の事物とシステムが大いに利用されている。本集めは、人口の集積した東京の電車では捨てられる本の量もケタが違い、また本を買う人もひきもきらないので、そのまま大量の焼却ゴミになるはずのものが商品になり、成り立っている。アルミ缶集めは社会的に「リサイクル」がいわれ、資源の分別収集が地域に課せられるようになったので容易になった。本来ならば委託を受けた業者が回収してまわるものを、いち早く野宿者が集めて売ってしまう。つまり都市社会の既存のシステムに食い込んで（横取りして）稼ぎをひねり出すのである。加えてこのように都市の機会が最大限に利用されるがゆえに、その地域の社会的状況に適した都市雑業の発達が促される部分もあった。例えば冒頭に挙げた表1からも分かるように、東京23区の西部では本集めが多く、逆に東部ではアルミ缶集め（廃品回収）が多い。その理由はいくつか考えられる。新宿駅周辺には缶の買取業者は1件しかないけれども、本を買い取る店は少なくない。また新宿には移動層が多く、アルミ缶を集めて売るまでの間に保管しておく場所も少ない。一方隅田川周辺では、川のほとりなどにより定着的にすむ層が多く、場所が確保されているので、かさばる缶が保管できる。しかも業者によっては野宿場所の近くまで買い取りにくるので勝手がよい。また地域の状況として東部の方が夜間人口の多い住宅街が広がっており、アルミ缶の量がまとまっている。

さらに、人々が集まり社会関係が生かされていた。野宿者間の社会関係については、すばやい関係の切り結びの一方で、多様でより継続的なネットワークが生かされていることを別稿にて示した(山口, 1998b)。それは仕事をめぐっては、いっそう切実なものとして表われているように思われる。例えば、本集めも缶集めも情報が必要とされていた。つまり、より多くの実りを効率的に得ようと思えば、何が金になるのか、どこにたくさんあるのか、いつ、どの時間帯が集めやすいのか、どこで金に替えることができるのか等を知ることが大切であることが事例からも読み取れる。また買取をする業者や個人を知り、うまくやっていくことも大変重要になっていた。都市雑業は飢餓すれすれの状態の中で、貴重な食いつ持に直接つながるだけに、競争もまた激しい。よってそのような情報を仕入れて生かすことは、ますます技術の一つとして重要性を帯びてくる。このようなものはアルバイト情報誌のように書かれて情報が流通するわけではないので、仲間同士の口コミの情報収集をするか、自分で開拓するかである。仲間や情報の多い都市はこの点でも多くの機会を与えていた。また社会関係に関しては、グループ内での役割分担や、幅広いネットワークの維持も重要であった。

加えて見逃せないのは、雑業に対して、人々がより積極的な意味づけをしている側面である。個人の状況や意味づけによって強弱があるのはもちろんであるが、本売りの例であげたように、「いちげんさんはお断り」で、「今日持ってきて、明日持ってこないっていうのは、世の中に反するからね」と本売りの世界の「常識」を強調する様子からもうかがえるように、この労働の技術ややりがいを口にし、積極的に意味づけようとする部分もある。

4. 都市雑業への制約

以上のように都市社会と密着する本・アルミ缶集めと売買取であるが、絶えず厳しい制約を受けている。

第一に、売買取に影響する具体的な締め付けがある。まず、その商品そのものが手に入りにくくされていた。例えば、駅のゴミ箱はあきらかに南

京錠やカギ穴がついたものが増加した。電車の中では車掌がこまめに網棚やイスの雑誌、新聞を回収するようになった⁴⁾。また、アルミ缶の収集も厳しくなってきた。先のアルミ缶回収のいっちゃんは、缶集めに出発する直前の立ち話で、最近の状況をこういていた。「長いときには、夜の6時とか7時から朝の6時までやったことがありますよ。最近は2時とか3時とかまでが多いです。夕べも結構動いたけど、結局20キロいかなかった。15キロくらいにしかならなかった。最近、どこでも出さなくなったし、抜き取りがしにくくなりました。今年の夏ごろからかな。今でも隅田のあっちの方では、一列通りにずらっとカゴに張り紙がしてあって、とりにくくなっていた。競争も激しいし、もう難しくなってきましたよ。」（前掲 いっちゃん／2000年12月5日）このように、資源の持ち去りを禁止するという内容の張り紙が回収カゴに頻繁に張られるようになった。また住民は回収車がくる直前に缶を出すようになり、野宿者は集めにくくなってきた。アルミ缶集めに多くの人が従事するようになって、競争が激しくなったことももちろんあるが、町会単位で締め出しの申し合わせができはじめており、明らかに収集に影響がでている。

次に、買取を行う業者への規制もある。例えば、雑誌の露店は道路交通法違反で頻繁に規制を受ける。先の新宿地下街の露店でも、店番をする人はたえず周囲に気を配り、警察の巡回に警戒していた。実際のところ、何度かの手入れの末、1997年、じょっちゃん、店番の人を含め5人が道路交通法違反の疑いで逮捕された。許可なしに露店を開いたというのが逮捕容疑であった⁵⁾。また、アルミ缶を買い取っていたS商会は、しばらくしてか

4) これは地下鉄でサリンを撒いて多数の死傷者を出したオウム真理教の事件が起こったところから厳しくなったという声もある。

5) 他にも本売りの露店はたくさん存在したのであるが、じょっちゃんは新宿近辺に3つの店を構えており、その地の利のよさもあって稼ぎが良かったこと、地下道にうず高く積み上げて本の倉庫を作ったり、彼ら自身もそのそばで大きな段ボールハウスを作って生活するなど、その場所への密着度が大きかったこと、そして何よりも警察に反抗的だったことが、狙い撃ちされた理由と予想される。

らアルミ缶の買取のみをやめてしまった。というのも、区のリサイクルの委託を受ける組合があり、S商会もそれに加入している。しかしその組合から苦情があったということで、行政から呼び出しを受けた。つまり、区から委託を受けて仕事をする場合に、回収したものの中にはスチール缶もアルミ缶も交じっていて、それを分けること自体も手間になるはずなのに、S商会は「ホームレス」からアルミ缶だけを買って取っていて、得をしている。しかも他の業者が回収するときにはスチール缶ばかりが残っていて不公平である。よって「ホームレス」からの買取をやめよ、さもなくば組合をやめよ、という話であったという。S商会のほうでは、区の委託をはずされたというのはやっぱりまずいので、買取は止めざるをえなかったという(前掲 S商会/2000年9月25日)。

第二に、さらに重要なことは、制約は目に見えにくいレベルでも強まっている。つまり、一方で野宿者が公共空間を占拠していることの問題性をいい、そして他方で野宿者の「社会復帰」を目指した対策の必要性をいうという言説である。例えば東京では、東京都企画審議室から1995年7月に調査報告書『新たな都市問題と対応の方向——路上生活をめぐって——』が出され、「路上生活者」をめぐる問題が「新たな都市問題」と位置づけられ、その実態やこれからの方向性が示された。1994年2月には都と区が一体となった「路上生活者問題に関する都区検討会」が発足しており、1996年には報告書が出された。ここでは「路上生活の自立を支援していくためには、路上生活の疲れを癒し、働く意欲を喚起することが必要である」とし、就労のための「自立支援センター」の構想などが盛り込まれた。そうした「路上生活者の社会復帰」のための行政の役割が語られる一方で、「公共施設本来の機能回復」も強調されている(路上生活者問題に関する都区検討会, 1996, pp. 14-17)。そして冒頭にて触れた東京都福祉局が2001年に発行した『東京のホームレス』においては、基本方針は同じであるが、より詳細で具体的な方向が打ち出された。「福祉分野における対策の方向」として、社会復帰に向けた3つのステップがあげられ、第一ステップでは「緊

急一時保護センター」に入所し、それぞれの「ニーズ」に応じて「タイプⅠ 就労自立層：心身が健康で就労意欲があり、自立が見込まれる者」「タイプⅡ 半福祉・半就労層：行政の部分的な支援を得ながら、就労をめざす者」「タイプⅢ 要援護層：医療、福祉などの援護が必要な者」「タイプⅣ 社会との関わりを望まない層：タイプⅠ・Ⅱ・Ⅲに該当しない者」に分けられる。その後、タイプに応じて、自立支援センターやグループホームなどを活用しながら、「社会生活への復帰」、すなわち「就労自立（アパート等）」「半福祉・半就労（宿泊所等）」「生活保護（居宅、施設、入院）」が目指されるという（東京都福祉局，2001，pp.39-44）。ここでいうところの「就労」はもちろん、「フォーマル」な労働市場における賃労働である。

以上のように野宿者の従事する都市雑業に対しては収集できなくするために商品に規制をかける，店に規制をかけて商売そのものを成り立たなくする，などの締め付けが存在した。それには，電車の不審物を取り除くため，駅売店の雑誌の売り上げに響くから，ゴミ箱周辺が汚されるから，許可なく露店を開いたから，資源の泥棒だから，同じ業者として不公平だから，などとさまざまな理由がつけられており，それも一面は事実かもしれない。しかしその根底には都市ゆえの管理の厳しさ，野宿をする人々が生業として行うことへの反発も存在するように思える。そして「一般的」な賃労働による「自立」を説くなど，野宿をしている人々は「正規」の仕事に従事しなければならないという方向があたりまえのように強調されることになっている。これによって，ますます都市雑業は本来あってはならない「不法な」「得体の知れない」活動として位置づけられることになる。

5. 小 括

このような方向性には雑業自体の性格を反映している部分もあるだろう。例えば雑業の条件の厳しさである。第2章でも示したように，雑業を通じて得る現金は極めて少ないのであるが，動いた時間の割にもとても合わない。例えば，事例で示したように本集めをしていた山下さんの1996年9月

30日の成果は、朝7時から夕方まで働いて80冊前後、約4500円だった。台車を押してアルミ缶を集めてまわるいっちゃんの2001年2月27日の成果は、やまない小雨の中、夕方18時から早朝まで台車を押して歩きどおしの11時間労働、集めたアルミ缶は約25キロで、相場では2000円に届かない。さらに、仕事は他人が捨てたものをごみ箱や回収カゴなどから拾い上げるものであり、汚かったり臭かったり、見栄えが悪かったりするものである。よってこのような生業を指して、野宿の当事者自身が自嘲気味に「小遣い銭稼ぎ」と称したり、「ごみ漁り」と蔑視することもある。

しかしこれまで記述してきたように、都市雑業は厳しい制約の一方で都市社会に根を下ろし、隙間をかいくぐって、または既存のシステムをうまく逆手にとって独自に営まれていた。そこには社会関係の切り結びも含めて技術と工夫がみとれ、さらには野宿者自身が店を作るなど、新たな稼ぎへの参与もみられた。加えて積極的な意味付与がなされていく側面もあった。このような雑業のありようは、安易な撤去や「回収」によって消すことはできないのである。

ただし忘れられてはならないのは、野宿している人々が野宿状態にあるがゆえに安く、都合よく使われていることである。先のアルミ缶売買のM商事が野宿者の集住地をくまなくまわって買取に精を出していたことにも端的に表われているように、野宿する人々が働いてわずかの現金を手に行っている背景には、業者などが彼／彼女らを利用している部分があることは見逃せないであろう。

最後に今後の課題をあげておきたい。本稿では現代にみられる都市雑業で、野宿の状態にある人々が従事する部分に注目してきた。しかし先にも触れたように、都市雑業に従事するのはいわゆる屋外で野宿状態にある人々のみではありえず、より広い「層」が成立していることが想像される。これについては都市の労働市場との関連で、社会・経済的な側面からもきちんと明らかにしていく必要があるだろう。さらに、関連して、都市雑業はずっと以前より存在しており、この歴史的な流れをふまえて現代の雑業がどの

ように位置づくのか、どこが変化し、または変化していないのか、それはあらためて考察する必要があると考えている⁶⁾。その際、都市雑業の展開に影響を与えてきたと思われる都市政策や産業政策など、制度的な側面は注視すべきであるように思われる。

参 考 文 献

- 青木秀男編著，1999，『場所をあける！——寄せ場／ホームレスの社会学——』松籟社
- 青木秀男，2000，『現代日本の都市下層——寄せ場と野宿者と外国人労働者——』明石書店
- 磯村英一，1989，『磯村英一都市論集Ⅰ』有斐閣
- 笠井和明，2000，「新しくもあり，古くもある下層」『寄せ場』13
- 笠井和明・平井 玄，2000，「都市雑業万歳」『現代思想』5
- 北川由紀彦，2001，「野宿者の集団形成と維持の過程——新宿駅周辺部を事例として——」『解放社会学研究』15
- 鈴木忠義，2000，『日本における生活問題研究——「貧困」研究に関する理論的検討——』東京都立大学大学院社会科学部研究科修士学位論文
- 隅谷三喜男，1967，『日本の労働問題』東京大学出版会
- 田巻松雄・山口恵子，2000a，「野宿者の就労面——東京東部圏の野宿者聞き取り調査報告——」『季刊シェルタレス』5

6) 隅谷三喜男は日本の資本主義と農民層の分解を論じる上で、都市の雑業層に注目した。日本における資本蓄積は大企業と中小企業のほかに「零細工業・家内労働・零細小売商等，雑多な営業を多数包含し，そこに本来的な賃労働のほかに零細企業労働者，家族労働者，家内労働者，人夫・日雇その他雑業等，雑多な生業が含まれている。」それを「本来的な賃労働関係の周辺で，前期的諸関係と雑多な就業条件の下にあるものとして，いちおう『(都市)雑業層』と名づけておく。日本資本主義はこのような層を多量に包含し，収奪してきたところに一特質を有する。」「雑業は前項で取りあげた雑業層の生業にほかならない。雑業といえども，多かれ少なかれ，賃金またはこれに類似したものをえて働いているものが多いが，その関係は家父長制や擬制的親分子分関係等に強く規制され，近代的賃労働関係と区別されるべきものを含んでいる。」(隅谷，1967，pp.63-66) このように彼は「雑業層」というひとつの社会層の成立を想定した。それから高度成長期を経て数十年たった現代において，彼の見出した「雑業層」はどのように捉えなおすことができるのか，歴史的な検討の余地があるように思われる。

- _____, 2000b, 「野宿層増大の背景と寄せ場の変容——『山谷, 上野調査』からみる飯場労働の実態——」『寄せ場』13
- 東京市社会局, 1935, 「紙屑拾ひ (バタヤ) 調査」『日本近代都市社会調査資料集成 1 東京市社会局調査報告書 [大正 9 年~昭和14年]』SBB 出版会
- 東京都福祉局, 2001, 『東京のホームレス——自立への新たなシステムの構築に向けて——』
- 都市生活研究会, 2000, 『平成十一年度路上生活者実態調査』
- 中川 清, 1985, 『日本の都市下層』勁草書房
- 山口恵子, 1998a, 「『こじき』と『こつじき』の間にて——新宿における野宿者のアイデンティティ構築過程——」東京都立大学社会学研究会『社会学論考』19
- _____, 1998b, 「新宿における野宿者の生きぬき戦略——野宿者間の社会関係を中心に——」『日本都市社会学会年報』16
- _____, 1999, 「見えない街の可能性——新宿で野宿する一人の『おじさん』の語りから——」青木秀男編著『場所をあける! ——寄せ場/ホームレスの社会学——』松籟社
- _____, 2001, 「東京・山谷にみる包摂と排除の構造——野宿者の増加と寄せ場の変容について——」『解放社会学研究』15
- 路上生活者問題に関する都区検討会, 1996, 『路上生活者問題に関する都区検討会報告書』

《付記》

本稿は、中根光敏を研究代表者として1998年度-2001年度科学研究費補助金基盤研究(B)を受けて行っている「『寄せ場』に関する社会学的研究」(課題番号: 10410062)と題した共同研究の成果の一部である。